

ソーシャルワーク教育における 実習指導者の役割と方法に関する一考察

南條正人・橋本美香・高梨友也

I. はじめに

2007年、介護・福祉ニーズの多様化・高度化に対応し、人材の確保・資質の向上を図るために、「社会福祉士及び介護福祉士法」が改正された。具体的には、①定義規定の見直し、②義務規定の見直し、③資格取得方法の見直しなどが行われた。それと同時に、教育内容も見直され、実習施設の場における実習スーパービジョンの実践が明確に位置づけられることとなった。また、社会福祉士実習指導者の資格要件は、「社会福祉士の資格取得後、3年以上相談援助業務に従事した経験のある者であって、厚生労働大臣が別に定める基準を満たす講習会の課程を修了したものであること」と定められ、社会福祉士実習指導者講習会の修了が義務づけられた。その社会福祉士実習指導者講習会について、厚生労働省社会・援護局は、実施要領を定めており、その具体的な科目として、「実習指導概論」、「実習マネジメント論」、「実習プログラミング論」、「実習スーパービジョン論」とし、合計14時間（2日間）で行うとしている。特に、「実習スーパービジョン論」では、講義の2時間に加え、演習が5時間とスーパービジョンに多くの時間が割かれている。しかしその項目としては、「問題実習生」へのスーパービジョンや「精神的な課題を抱えている実習生」、「利用者との関係不全を起こした実習生」、「不適切な関わりをした学生」への対応が主となっており¹⁾、実習生の学びの状態や実習の段階に適したスーパービジョンの内容までは網羅されていないといえる。

蔵野らは、スーパービジョン経験が実習指導に与える影響に関する研究において、スーパービジョン経験者が有する傾向の1つとして、実際のスーパービジョン実践の中で、管理的機能、支持的機能、教育的機能を意図的に展開できているとしている²⁾。しかし、社会福祉の現場では、日常業務で手一杯で、実習生を引き受けたものの十分なスーパービジョンを提供できない機関も少なくない³⁾。また、小松尾は、現在、実習指導者として実習指導を担っている多くの社会福祉士は、新カリキュラムに移行する前の、旧カリキュラム時代に社会福祉士の養成教育を受けている。つまり、自身が

その養成課程で、実習教育の一環として明確に位置づけられた実習スーパービジョンを必ずしも受けているわけではないと指摘し、実習スーパービジョンがスーパービジョンと同じ機能や目的をもつとすれば、実習指導者にも実習スーパービジョンを受けた経験が求められると述べている⁴⁾。

これまでの社会福祉士実習指導者における実習スーパービジョンに関する研究では、小松尾は、社会福祉士実習指導者が実習スーパービジョンで大切にしたいと思う機能は、7割程度で支持的機能であったこと、反対に困難と思われる機能は、7割以上で教育的機能であったことを報告している⁵⁾。また、渡邊らは、社会福祉士実習指導者実習スーパービジョンの現状と課題として、「指導者が抱えるジレンマ」「スーパービジョンを行う環境整備」「スーパーバイザーの自信のなさ」の3つが示されたことを報告している⁶⁾。

このような実習スーパービジョンの現状や課題についての調査報告は多いものの、その現状や課題を明らかにすることに留まり、実習スーパービジョンにおけるスーパーバイザーの役割・方法を明確にした研究は少ない。

そこで、本研究では、実習生がより効果的なソーシャルワーク実習を行うためには、実習スーパービジョンにおけるスーパーバイザーの役割・方法を明確にすることが必要不可欠であると考え、社会福祉士実習指導者における実習スーパービジョンの現状と課題を明らかにするとともに、スーパーバイザーの役割と方法について考察することを目的とする。

II. 用語の定義

本調査の質問紙における実習スーパービジョンの機能である「管理的スーパービジョン」、「教育的スーパービジョン」、「支持的スーパービジョン」の用語の定義についてはKadushin⁷⁾らや福山⁸⁾の定義を参考にし、以下のとおりに用いることとする。

「管理的スーパービジョン」は、効果的に実習ができるように働く環境を整え提供することを目標とし、実習生の適切な実習を担保するための幅広い業務を行うこと。「教育的スーパービジョン」は、実習生が職業上の成長をとげ実習を効果的にこなせるように能力を伸ばすこと（相談援助の知識・技術を最大限に引き出すこと）を目標とし、専門職としての知識・技術・倫理を実習生が習得して専門性を高められるように教育すること。「支持的スーパービジョン」は、実習生が実習から満足感が得られるように支援することを目標とし、心理的・情緒的に消耗する実習生を支えることとした。

III. 研究方法

1. 対象

調査対象はA県内の社会福祉施設に所属し、社会福祉士の資格取得後、3年以上相談援助業務に従事した経験のある者であって、社会福祉士実習指導者講習会を修了した者とし、無作為に抽出した73名に自記式質問紙の郵送法により調査を行った。調査

の協力が得られた46名のうち、欠損を除いた41名を調査対象とした（有効回答率56.2%）。

2. 調査期間

調査期間は、2019年9月～10月とし、2019年9月1日現在の状況で回答を求めた。

3. 調査項目

本調査で用いた質問項目は、共同研究者らで検討し、オリジナルの質問紙を作成した。具体的な質問項目は、フェイスシートとして、所属、性別、年齢、社会福祉士の実習指導年数、保有資格。実習スーパービジョンについては、①実習スーパービジョンについての考えについて（大切にしたい機能、困難だと感じる機能）、実習スーパービジョンの中から選択回答とし、その理由を自由記述で求めた。②実習スーパービジョンをして良かったと思う理由について、該当する項目を選択する複数回答とした。③実習スーパービジョンについてのやりがいについて、「かなりそう思う」から「ほとんどそう思わない」までの5件法とし、またやりがいを感じた事例について自由記述で求めた。④実習スーパービジョンについての負担について、「かなりそう思う」から「ほとんどそう思わない」までの5件法とし、その理由について該当する項目を選択する複数回答とした。⑤実習スーパービジョンの現状について、時間については設けているか否かを求め、設けている場合はその程度についても回答を求めた。焦点については、該当する項目を選択する複数回答とした。内容については、「かなり行っている」から「ほとんど行っていない」までの5件法とした。

4. 分析方法

データ分析について、共同研究者が設定した選択肢にもとづいた回答は、統計ソフトSPSSver.20を使用して統計処理を行った。また、自由記述については、コーディングを行い、カテゴリーを生成した。コーディング作業については、客観性を高めるために共同研究者で検討し行った。

5. 倫理的配慮

協力者へ郵送する質問紙には、調査の目的と方法、調査の参加は任意であること、プライバシーは厳重に保護されることを記載し、協力の得られる場合は回答して返却するよう依頼した。回答・返送をもって調査協力を同意したものとした。

なお、東北文教大学・東北文教大学短期大学部研究倫理審査委員会に研究倫理申請書により申請を行い、研究への協力者に対する情報提供及び同意、協力者への負担・苦痛の回避や生じうる危険と不快に対する配慮、協力者の個人情報の保護への対応のための手続き及び方法等について2019年5月23日承認を受けた。

IV. 結果

1. 対象属性

対象属性は表1のとおりである。所属種別の内訳は、高齢者福祉施設23名(56.1%)、

障がい者福祉施設7名(17.1%)、児童福祉施設2名(4.9%)、社会福祉協議会4名(9.8%)、その他(地域包括支援センター、福祉事務所等)5名(12.1%)であった。性別は男性が18名(43.9%)、女性が23名(56.1%)であった。年齢は50代が15名(36.6%)と最も多く、次いで30代と40代がそれぞれ11名(26.8%)、20代と60代がそれぞれ2名(4.9%)であった。社会福祉士の実習指導年数は、5年未満が14名(34.2%)と最も多く、次いで6年～10年未満が13名(31.7%)、10年以上が6名(14.6%)、不明が8名(19.5%)であった。

社会福祉士以外の保有資格は、介護支援専門員(ケアマネージャー)が28名(68.3%)、介護福祉士が21名(51.2%)と半数以上の者が保有しており、精神保健福祉士は4名(9.8%)であった。

表1. 対象属性

項 目		n	%	項 目		n	%	項 目		n	%			
所属種別				性別				実習指導年数						
高齢者福祉施設	23	56.1	男性	18	43.9	5年未満	14	34.2						
障がい者福祉施設	7	17.1	女性	23	56.1	6年～10未満	13	31.7						
児童福祉施設	2	4.9	年齢				10年以上	6	14.6					
社会福祉協議会	4	9.8					20代	2	4.9	不明	8	19.5		
その他 (地域包括、福祉事務所等)	5	12.1	30代	11	26.8	保有資格								
			40代	11	26.8					介護支援専門員	28	68.3		
			50代	15	36.6					介護福祉士	21	51.2		
			60代	2	4.9					精神保健福祉士	4	9.8		

2. 実習スーパービジョンについての考えについて

1) 大切にしたいと思う機能と困難だと思う機能

スーパーバイザーは、管理的、教育的、そして支持的機能を肯定的な関係性の文脈で担いながら、スーパーバイザーとの相互作用を遂行すると理解されており、スーパービジョンは主に3つの機能で構成されている⁹⁾。その3つの機能の中で一番大切にしたいと思う機能、一番困難だと思う機能について回答を求めた。

その結果、一番大切にしたいと思う機能では、「支持的スーパービジョン」が62.5%と最も多く、次いで「教育的スーパービジョン」が32.5%、「管理的スーパービジョン」は5.0%であった(図1)。その理由としては、管理的スーパービジョンでは、「専門職としての機会を確保するために環境を整える」、教育的スーパービジョンでは、「現場実習だからこそ得られる知識を習得してほしい」や「専門職養成に必要」等であった。また、支持的スーパービジョンでは、「不安が無いほうがよりよい実習に繋がる」や「理解度や不安を把握することが、教育の効率化に繋がる」等であった。

一番困難だと思う機能では、「管理的スーパービジョン」が40.0%と最も多く、次いで「教育的スーパービジョン」が37.5%、「支持的スーパービジョン」が22.5%であった。その理由としては、管理的スーパービジョンでは、「人材不足の中、十分には環境を整えることが難しい」や「調整等をするのに様々な障壁があるため」、教育的スーパービジョンでは「学校で学んだこととの相違により学生を混乱させてしまわないか心配」や「短期間で専門性は難しい」等であった。また、支持的スーパービジョンでは、「実習生の支持には個別性の配慮が必要である」や「心情をつかみとる機会が少ない」等であった。

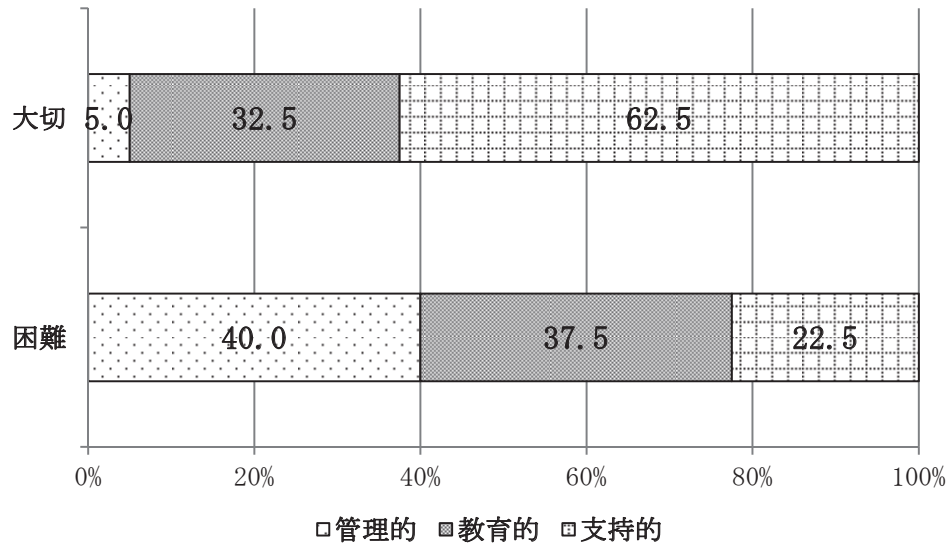


図1. 一番大切にしたいと思う機能、一番困難だと思う機能

2) 実習スーパービジョンをして良かったと思う理由

「実習スーパービジョンをして良かったと思う理由」では、「自己の実践の振り返り」、「実習指導者としての自己覚知」、「後進育成への貢献」、「自己のスーパービジョンスキルアップ」、「所属機関の実習に対する意識の変化」、「自己研鑽」、「他職員のケア実践に対する意識の変化」に対して、複数回答で求めた。

その結果、高い順に「自己の実践の振り返り」(65.9%)、「後進育成への貢献」(56.1%)、「実習指導者としての自己覚知」(46.3%)、「自己のスーパービジョンスキルアップ」(36.6%)、「自己研鑽」(29.3%)、「所属機関の実習に対する意識の変化」(26.8%)、「他職員のケア実践に対する意識の変化」(17.1%)であった(図2)。

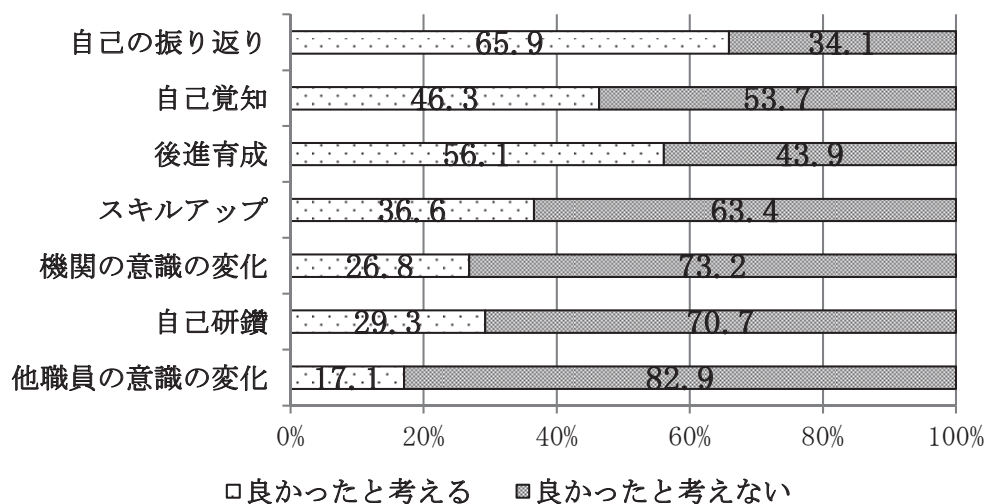


図2. 実習スーパービジョンをして良かったと思う理由

3. 実習スーパービジョンについてのやりがいと負担について

1) やりがいと負担

「実習スーパービジョンにやりがいを感じるか」と「実習スーパービジョンに負担を感じるか」に対して、それぞれ「かなりそう思う」、「まあまあそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「ほとんどそう思わない」で回答を求めた。

その結果、「実習スーパービジョンにやりがいを感じるか」では、「かなりそう思う」(12.2%)と「まあまあそう思う」(65.9%)で8割程度を占めた(図3)。

「実習スーパービジョンに負担を感じるか」では、「かなりそう思う」(7.3%)と「まあまあそう思う」(46.3%)で5割程度を占めた。

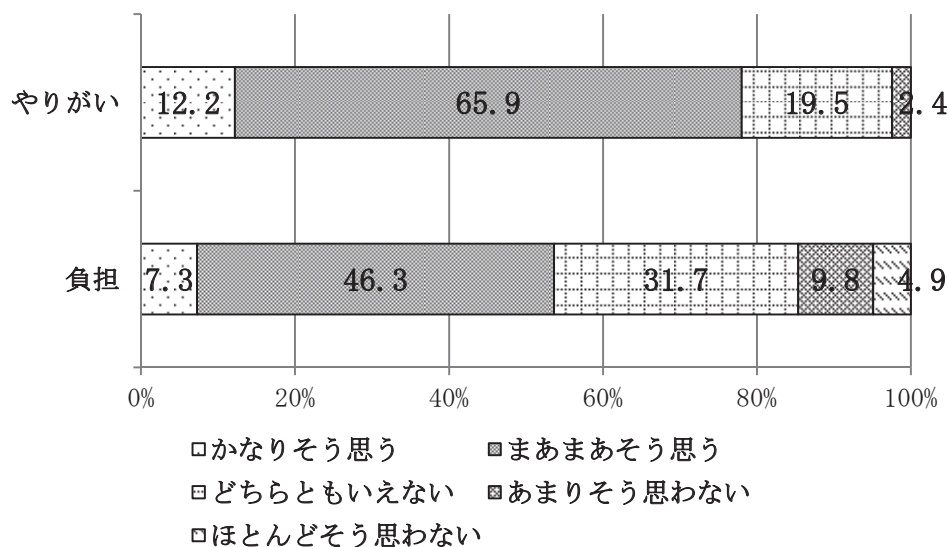


図3. 実習スーパービジョンにおけるやりがいと負担

2) これまでの実習スーパービジョンにおいて、やりがいを感じた事例

これまでの実習スーパービジョンにおいて、やりがいを感じた事例についての記述を25件抽出し、【実習生の成長】、【後進育成】、【実習生の態度・意欲】、【指導者の成長】という4つの観点に整理した。

【実習生の成長】では、「知識習得だけでなく、人としても大きく成長したと実感した」や「実習日誌の内容が飛躍的に変わった」等で、全記述25件中12件(48.0%)であった。

【後進育成】では、「実習を終えた際に、社会福祉士になりたいと言われた」や「実習生が後輩になった」等で、全記述25件中6件(24.0%)であった。

【実習生の態度・意欲】では、「意欲のある実習生に出会ったときに、一番やりがいを感じられた」等で、全記述25件中4件(16.0%)であった。

【指導者の成長】では、「指導者の勉強にもなったと感じた」等で、全記述25件中3件(12.0%)であった。

3) これまでの実習スーパービジョンにおいて、負担と感じた理由

「これまでの実習スーパービジョンにおいて、負担と感じた理由」では、「時間的余裕」、「実習指導者としての指導力不足」、「所属機関の理解不足」、「上司の理解不

足]、「同僚の理解不足」、「他職種の理解不足」、「利用者の理解不足」、「教育機関との連携」、「実習生の態度・意欲不足」、「相談できる人がいない」に対して、複数回答で求めた。

その結果、高い順に「時間的余裕」（80.5％）と「実習指導者としての指導力不足」（53.7％）が半数を超え、次いで「実習生の態度・意欲不足」（19.5％）、「教育機関との連携」（9.8％）、「所属機関の理解不足」（7.3％）、「他職種の理解不足」（4.9％）、「上司の理解不足」（2.4％）と「相談できる人がいない」（2.4％）であり、「同僚の理解不足」と「利用者の理解不足」と回答した者はいなかった（図4）。

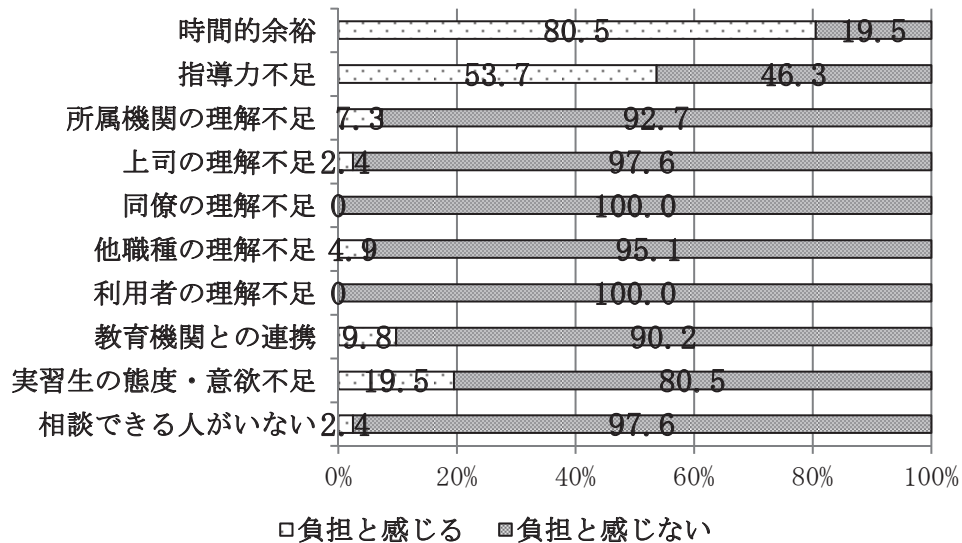


図4. これまでの実習スーパービジョンにおいて、負担と感じる理由

4. 実習スーパービジョンの現状について

1) 実習スーパービジョンの有無、頻度、時間

実習スーパービジョンの時間を設けているか否かの回答では、「設けている」が97.4％に対し、「設けていない」が2.6％であった。また、「設けている」と回答した者に対して、その頻度を尋ねたところ、高い順に「毎日」（31.6％）、「2日～4日に1度程度」（28.9％）、「1週間に1度程度」（26.3％）、「実習中に2～3回」（10.5％）、「実習中に1度」（2.6％）であった。さらに、その時間の程度の手答では、「15分～30分」（55.3％）が最も多く、次いで「30分～45分」（21.1％）であり、8割程度を占めた。

2) 実習スーパービジョンの際の焦点

「実習スーパービジョンの際の焦点」では、「利用者理解」、「利用者との関係形成」、「実習施設の理念や概要」、「個別ニーズの理解」、「実習目標の達成度」、「権利擁護の意識」、「実習日誌の記載内容」、「実習課題の理解」、「利用者の自立支援」、「知識の修得」、「実習生の学習能力」、「実習生のメンタル援助」、「実習生の達成感支援」、「実習生の体験の整理」、「多職種連携の理解」に対して、複数回答で求めた。

その結果、高い順に「利用者との関係形成」（58.5％）、「利用者理解」（56.1％）、「多職種連携の理解」（53.7％）、「実習生の体験の整理」（51.2％）が5割を超え、次いで「実習生の達成感支援」（48.8％）、「実習生のメンタル援助」（39.0％）、「個別ニーズ

の理解」(36.6%)と「権利擁護の意識」(36.6%)、「実習目標の達成度」(34.1%)、「実習課題の理解」(31.7%)、「実習日誌の記載内容」(22.0%)と「知識の修得」(22.0%)、「実習施設の理念や概要」(17.1%)、「利用者の自立支援」(14.6%)、「実習生の学習能力」(9.8%)であった(図5)。

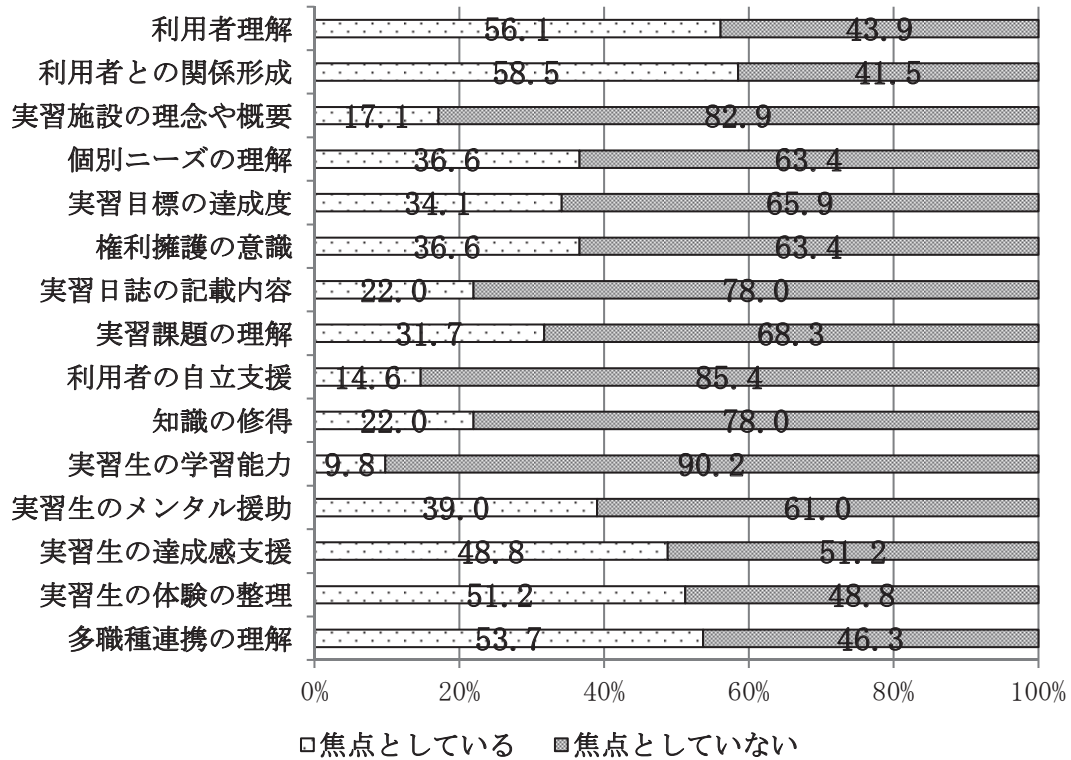


図5. 実習スーパービジョンの際の焦点

3) 実習スーパービジョンの内容

「実習スーパービジョンにおいて、自分自身がどの程度行っていますか」の14項目に対して、それぞれ「かなり行っている」、「まあまあ行っている」、「どちらともいえない」、「あまり行っていない」、「ほとんど行っていない」で回答を求めた。

その結果、「かなり行っている」と「まあまあ行っている」で8割以上を占めた項目は、高い順に「実習生に必要な情報を提供する」(92.7%)、「実習生に肯定的に関わりながら話を傾聴する」(90.2%)、「実習から満足感が得られるよう支援する」(87.8%)、「実習しやすいような職場の人間関係となるよう配慮する」(85.3%)と「実習生が心理的に消耗しないよう配慮する」(85.3%)、「実習生の気づきを促すフィードバックをする」(80.5%)と「利用者への不利益が危惧される時は回避指示をする」(80.5%)の7項目であった(図6)。

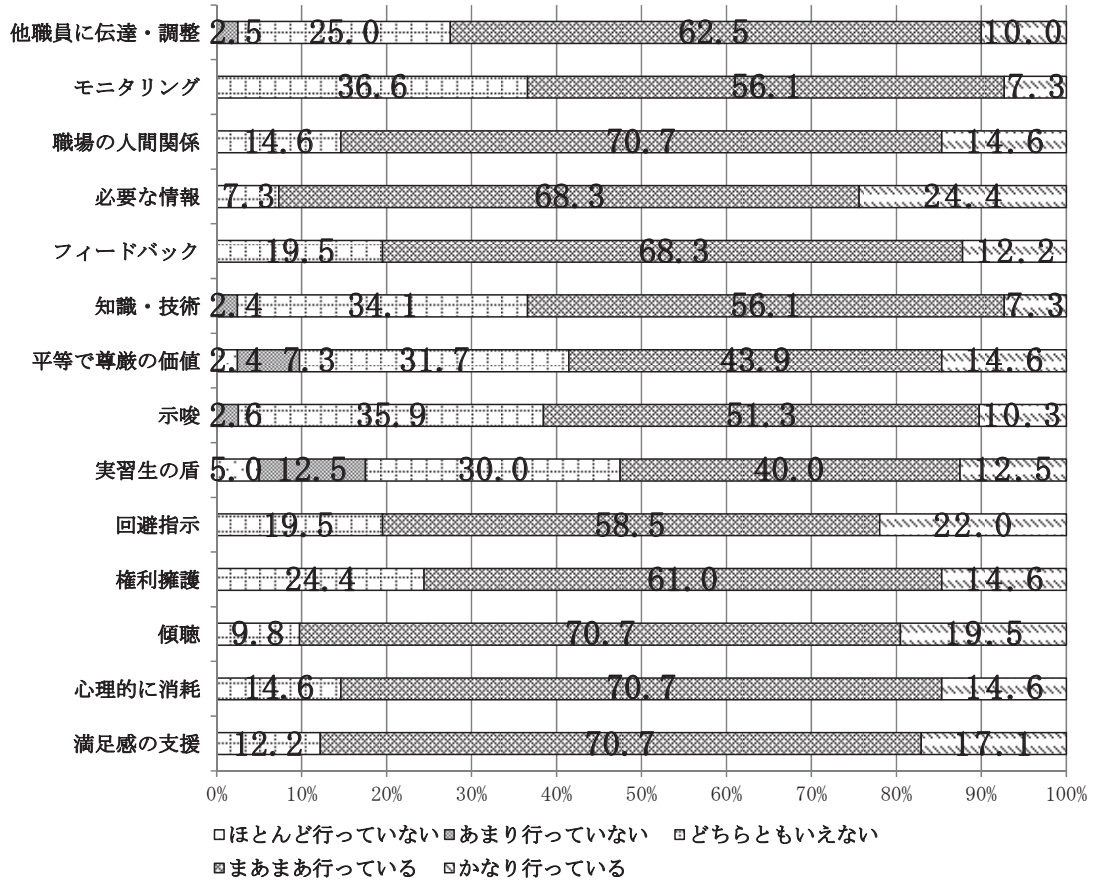


図6. 実習スーパービジョンにおいて、自分自身がどの程度行っていますか

V. 考察

これまでの社会福祉士実習指導者に対する実習スーパービジョンの認識に関する研究では、実習スーパービジョンを実践する際に大切にしたい機能として、7割近くの社会福祉士実習指導者が支持的機能と回答している¹⁰⁾。本研究においても「支持的スーパービジョン」が62.5%と最も多く、次いで「教育的スーパービジョン」が32.5%、「管理的スーパービジョン」は5.0%であり、先行研究結果¹¹⁾を支持した。これまでスーパービジョンの機能である管理的・教育的・支持的機能は並列に位置づけられていたが、村田はスーパービジョンが日本の福祉・医療の対人援助実践の場に根付き、普及していくには、組織人としての資質の向上や対人援助職の専門性を説く管理的・教育的スーパービジョン以前に、援助職員の苦しみを聴き、それを通して対人援助専門職としての質を高める支持的スーパービジョンが必要であると述べている¹²⁾。このことは、現職の対人援助職に限ったことではなく、実習生にも同様またはそれ以上に必要であると考えられる。大切にしたいと思う機能を支持的スーパービジョンと回答した者の理由には、「不安が無いほうがよりよい実習に繋がる」や「理解度や不安を把握することが、教育の効率化に繋がる」等であった。このことから、スーパーバイザーは、実習生の実習に対する不安感や緊張感を軽減するために、支持

的な雰囲気やベースとして、実習生を受容する関わりを持つことが重要な役割であるとする。また、このような支持的スーパービジョンを行うことによって、管理的スーパービジョンと教育的スーパービジョンが効果的に機能すると考えられる。

一番大切にしたいと思う機能では、「支持的スーパービジョン」が最も多く、次いで「教育的スーパービジョン」、「管理的スーパービジョン」であった。これに対して、一番困難だと思える機能では、「管理的スーパービジョン」が最も多く、次いで「教育的スーパービジョン」、「支持的スーパービジョン」であった。管理的スーパービジョンを困難と考える理由としては、「人材不足の中、十分には環境を整えることが難しい」や「調整等をするのに様々な障壁があるため」であり、渡邊らの研究¹³⁾で明らかになった「スーパービジョンを行う環境整備」と同様の理由であった。これは、職場実習・職種実習・ソーシャルワーク実習の3段階でのソーシャルワーク実習の展開においては、ソーシャルワークが発揮される職場や組織、職種業務などを学ぶ必要があるとされており、多くの機関や他職種との連携を図らなければならないことが要因であると考えられる。また、教育的スーパービジョンでは「学校で学んだこととの相違により学生を混乱させてしまわないか心配」等であり、渡邊らの研究¹⁴⁾で明らかになった「スーパーバイザーの自信のなさ」と同様の理由であった。このことから、社会福祉士養成施設である大学等での既修得知識・技術と福祉現場における学びを統合させるためには、社会福祉士養成施設の実習担当教員との連携が重要であるといえよう。特に、支持的スーパービジョンに関係する実習生の性格を含めた背景と状況等を共有しておく必要があると考えられる。また、スーパーバイザーである実習指導者は、効果的な実習スーパービジョンを行う方法として、自己覚知と知識・技術を振り返る等、常に自己研鑽に努めることが考えられる。

実習スーパービジョンについてのやりがいについては、「かなりそう思う」と「まあまあそう思う」で8割程度を占め、その具体的な例として【実習生の成長】、【後進育成】、【実習生の態度・意欲】、【指導者の成長】が示された。一方、実習スーパービジョンに負担を感じるかという質問では、「かなりそう思う」と「まあまあそう思う」で5割程度を占めた。その理由としては、図4に示したとおり、「時間的余裕」と「実習指導者としての指導力不足」が半数を超えており、実習スーパービジョンへのやりがいを感じつつも、時間的余裕がないことへの負担を感じていた。このことから実習指導者に対する周囲の理解とサポートを得ることが、効果的なスーパービジョンを行うための方法であると考えられる。また、実習スーパービジョンに対してスーパーバイザーが感じることは、スーパービジョンをよく理解していないという不安や、自分自身の知識や技術がスーパーバイザーとしてふさわしいものかに疑問を持ちがちであることが指摘されているように¹⁵⁾、実習指導者としての指導力不足への負担を感じていることから、スーパーバイザーである実習指導者もまた、効果的な実習スーパービジョンを行う方法として、上司等の職員からスーパービジョンを受けることであるといえる。

実習スーパービジョンの時間を設けているか否かの回答では、「設けている」と回答した者がほとんどであった。2007年の社会福祉士の教育内容の見直しにおいて、実習施設における実習スーパービジョンの実践が明確に位置づけられたことや、学生時代によりスーパービジョンを受けたソーシャルワーカーは、新人ワーカーになった際、スーパービジョンの必要性を評価し、スーパービジョンを積極的に受けようと

する¹⁶⁾ことから、実習スーパービジョンの必要性かつ重要性は明らかである。しかし、その頻度と時間では、回答割合に大きな差があり、実習スーパービジョンの必要性は理解しつつも、あまりスーパービジョンの頻度や時間を確保できない実習指導者もいると思われる。このことは、日常的な業務に加え、実習指導を行うことは、人材不足や時間的余裕も無い中で、調整し環境を整えることが困難であることが伺える。

実習スーパービジョンの際の焦点としては、「利用者との関係形成」、「利用者理解」、「多職種連携の理解」、「実習生の体験の整理」が5割を超えた。これは、支援対象である利用者を理解し、利用者との関係形成に焦点が置かれていることは、基本的なコミュニケーション技術が求められている表れだと思われる。社会福祉士の教育科目「相談援助演習」に含まれる事項には、基本的なコミュニケーション技術の習得が位置づけられており、具体的な援助場面を想定したロールプレイを中心とする演習形態によって行われる。この基本的なコミュニケーションは、社会福祉士のみならず、対人援助職の根幹となる重要な技術であるため、対人援助職の養成校では、その質が担保されるよう教育する必要があると考える。また、スーパーバイザーである実習生の成長を促していくためには、スーパーバイザーである実習指導者は、実習担当教員との対話ができる等、信頼関係を構築することが役割の1つであると考えられる。

実習スーパービジョンの内容としては、8割以上を占めた項目は、利用者を理解するために「実習生に必要な情報を提供する」や、支持的スーパービジョンである「実習生に肯定的に関わりながら話を傾聴する」、「実習から満足感が得られるよう支援する」、「実習しやすいような職場の人間関係となるよう配慮する」、「実習生が心理的に消耗しないよう配慮する」であり、基本的なコミュニケーション技術と支持的スーパービジョンの内容となっていることがわかる。その中でも、「実習生に肯定的に関わりながら話を傾聴する」ことによって、スーパーバイザーとして、スーパーバイザーである実習生をいかに理解し、援助していくかの見立てが、スーパービジョンの成果に大きく影響すると考える。

VI. まとめ

本研究では、社会福祉士実習指導者における実習スーパービジョンの現状と課題を明らかにし、スーパーバイザーの役割と方法について考察することを目的とした。その研究結果は以下のようにまとめることができる。

①スーパービジョンの3つの機能のうち、一番大切にしたいと思う機能は、「支持的スーパービジョン」、「教育的スーパービジョン」、「管理的スーパービジョン」の順であった。

②スーパービジョンの3つの機能のうち、一番困難だと思う機能は、「管理的スーパービジョン」、「教育的スーパービジョン」、「支持的スーパービジョン」の順であった。

③実習スーパービジョンへのやりがいを感じつつも、時間的余裕がないことへの負担を感じていた。

④実習スーパービジョンの際の焦点としては、「利用者との関係形成」、「利用者理解」等で高い割合となった。

以上のことから、スーパーバイザーである実習指導者には、「支持的スーパービジョン」を大切に、「ホスピタリティマインド」を持つことと、教育の質が担保された養成校の実習担当教員との関係を構築する役割がある。また、効果的な実習スーパービジョンを行う方法としては、「自己研鑽」に努め、「周囲のサポート」を得ることが重要であるとの結論に至った。

本研究では、調査対象が41名であったことから、一般化することはできず、調査にご協力いただいた対象者が所属する機関について、前述のような現状と課題があるのではないかということを示すことに留まっている。しかし、社会福祉士実習指導者の置かれている状況と、実習スーパービジョンの現状と課題を明らかにできたことは一定の意義があると思われる。今後、さらにデータの収集および分析を進めることで、社会福祉士実習指導者の役割と方法を明確化できるものとする。

また、社会福祉の専門職養成に関わらず、他の専門職養成においても示唆が得られる可能性があると思われるため、他の専門職養成にも調査を広げることを今後の課題としたい。

【引用文献】

- 1) 日本ソーシャルワーク教育学校連盟 (2015)：相談援助実習指導・現場実習教員テキスト，中央法規，169.
- 2) 蔵野ともみ・朝倉由衣・高橋未香・新美咲月 (2018)：スーパービジョン経験が実習指導に与える影響に関する研究，大妻女子大学人間関係学部紀要20，111－117.
- 3) 荒川義子・藤井美和・大和三重・他 (2003)：社会福祉実習におけるスーパービジョンの研究－スーパービジョンに対する学生の満足度に影響を与える要因について－，関西学院大学社会学部紀要95，71－78.
- 4) 小松尾京子 (2015)：実習指導者による実習スーパービジョンの課題－教育的機能を中心として－，日本福祉大学社会福祉論集133，75－86.
- 5) 前括書4)
- 6) 渡邊隆文・安保尚・井坂優美・他 (2018)：相談援助実習における実習スーパービジョンの現状と今後の課題－実習指導者フォローアップ研修におけるフォーカスグループインタビューデータのテキストマイニングから－，健康科学大学紀要14，17－26.
- 7) 福山和女監修訳 (2016)：スーパービジョンインソーシャルワーク第5版，中央法規.
- 8) 福山和女編著 (2008)：ソーシャルワークのスーパービジョン 人の理解の探究，ミネルヴァ書房.
- 9) 前括書8)
- 10) 前括書4)
- 11) 前括書4)
- 12) 村田久行 (2010)：援助者の援助－支持的スーパービジョンの理論と実際－，川島書店.

- 13) 前括書6)
- 14) 前括書6)
- 15) 松本武子・木村嘉男訳（1976）：社会福祉のスーパービジョン，誠信書房.
- 16) 前括書15)